

## Information Processing

## おじさま族とコンピューター—悩める青年実業家達—

山下 邦 弘

最近、同窓会などで、中学や高校時代の友人と合うことが多くなってきました。彼等の多くは、一旦は企業などに入ってサラリーマンをやった後、会社勤めをやめ、家の稼業をついでいると云う者です。35才前後の地方都市出身者というのは、そういうパターンが多いようです。ところで、そういう彼等に、私がコンピューター関係の仕事をしていると申しますと、「いやー、実は仕事に使おうと思ってパソコン買ったんだけど、どうしていいかわからなくて困っているんだよ。なんとかならない?」とか、「うちの店でもそろそろコンピューターをいれて合理化しないといけないと思うんだけど、業者にまかせると数百万もかかると言う話だし、一度相談にのってくれないかい」等と、何人かに一人は必ず言うのです。「OA」という言葉が流行ってから数年たち、そこそこの規模の企業などでは、一応定着しつつあるコンピューターですが、中小企業や、あまっさえ小さな商店などでは、まだまだ多くの人々が悩んでいるようです。もちろん、コンピューターを扱える、若くて優秀な人間を雇えば話は簡単なわけですが、哀しいかな中小企業では、そのような人材は雇いたくても来てくれないようです。個人商店に至っては、わざわざ人を雇っていたら店がつぶれてしまいます。従って、社長自らコンピューターに挑戦せねば成らぬのであります。

彼等とて、地方都市の名門高校を卒業しており、学生時代にはそこそこの学力があった訳で、けっしてコンピューターを受け付けられない訳ではない筈です。では何故その優秀な彼等がコンピューターに四苦八苦するのでしょうか。まず一つ言えることは彼等の性格自体

に問題があるということです。コンピューターがだめだという彼等の多くは、思考が論理的でない。大雑把である。いわゆる‘どんぶり勘定’的である。すなわち、論理を一つ一つ積み上げて考えることが苦手である、という事があげられます。これは、そういう論理的な思考をするような教育を受けてきていないということも一因であろうと思われます。もしかしたら、これ、日本人の基本的性格なんでしょうか、あるいは、金沢人の特質なのかもしれません。さらに、彼等の多くは、凝り性ではないという事も判明しました。おなじ年代の仲間でも、例えば、溪流釣に凝っているとか、盆栽に凝っているとか、要するにどうすればうまくいくのかということに常に考える、探求心を持っている人は、コンピューターもうまく使いこなすことができるようです。同じ、毎晩飲みあわいて、カラオケ好きで、ゴルフが好きな人間であっても、カラオケを一生懸命練習してるとか、ゴルフを上達させようとするとか、女性の口説きかたを研究するとか、なにかそういう姿勢でいるのと、そうでないのとでは、はっきりと違いが見られます。

ということで、人間も中年にさしかかりますと、その性格を換えることは、ほとんど不可能となってまいりますので、コンピューター向きではない人には、はっきりと「あんたは向いてないからやめなさい」と言うことにしています。

コンピューターは、まさに、人間の性格を映し出す鏡のようなものだったのですね。

(金沢大学経済学部助手)